

聖書：ルカの福音書 15：1～10

説教題：大きな喜びが天に

日時：2021年12月19日（朝拝）

今日はルカの福音書 15 章前半に記されている 2 つのたとえ話を選ばせていただきました。この後には有名な「放蕩息子のたとえ」が続きます。そして皆さんご存知と思いますが、これら 3 つはすべて同じ一つのテーマに関するたとえです。私は大学生の頃、それを初めて知ってびっくりしました。さらに神学校を卒業する頃に知ったのは、この 3 つのたとえ話は、これが語られた背景に注目することが重要であるということでした。つまりたとえ話の前の 15 章 1～3 節が特に大事であるということです。そのことを押さえて読んだ時、かすんでいた部分がすっきりと晴れて、ルカ 15 章のすべてがクリアーに見えて来る経験をして驚いたものです。このクリスマス礼拝の日、この箇所から、ここに示されている神の御心について思いを巡らしたいと思います。

さて今申しあげましたように、この箇所において決定的に大事なのは場面状況の理解です。1 節に「取税人たちや罪人たちがみな、話を聞こうとしてイエスの近くにやって来た」とあります。取税人とはローマ帝国の下で民衆から税金を取る仕事をしてきた人たちのことで、ここに出て来る取税人はユダヤ人でありながら、異邦人ローマのために同胞から税金を巻き上げ、しかもそこからいくらか着服して私腹を肥やしていたということで、ユダヤ人から激しく嫌われ、見下されていた人々でした。また罪人とは悪い行いのためにそう呼ばれた人々で、盗人、大酒飲み、遊女など当時の宗教的共同体の習慣に合わせて生活することをしなかった人々のことでした。パリサイ人や律法学者たちは、このような取税人や罪人たちと一緒にいたら自分たちも汚れると考えて、彼らから離れていました。ところがイエス様は彼らを退けず、ここで言われている通り、食事まで一緒にされました。食事は親しい交わりの象徴です。それは相手に対する信頼と友情の証しであり、自分自身を分かち合う行為です。そこでパリサイ人たちは 2 節のように文句を言ったわけです。「この人は罪人たちを受け入れて、一緒に食事をしている」と。この批判に対して答えられたのがルカ 15 章の三つのたとえ話です。

まず一つ目に語られたのは 4～7 節の「なくした羊のたとえ」です。特に詳しい説明は不要かと思います。羊飼いが羊を野に連れて行って帰る時だったのか、数えてみ

ると一匹足りなかった。さてどうするか。その人は 99 匹を野に残していなくなった一匹を探しに出かけるとあります。ある人はここを読んで、99 匹はどうなるのかと問いますが、ポイントは羊飼いは一匹を大事にするということです。一匹を大事にする彼はもちろん 99 匹も大事にします。その 99 匹は安全な場所に置いたのか、他の人に任せたのでしょうか。彼は失われた一匹を求めて捜し歩くのです。これはとりあえずその辺を少し捜してみたという程度ではありません。4 節に「いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩く」とあります。ですから忍耐強くそうするのです。必ず探し出す！見つかるまでは帰らない！との決意をもってです。後でも述べますが、私たちはここにクリスマスのお出来事を重ねて見ることはできないのでしょうか。まことの羊飼いであるイエス様は私たちを探すためにこの世に来てくださいました。この失われた羊とは私たち一人一人のことです。神のもとから離れ、そのままでは永久に失われ、滅びに至りかねない私たち。そんな迷い出た者たちを神が求めてくださり、イエス様を遣わしてくださいました。

さて羊飼いはついになくした羊を見つけます。その時どうしたでしょう。5 節に「見つけたら、喜んで羊を肩に担ぎ」とあります。見つけてもらった羊は心から安心して、喜んだと思います。羊は頑固な動物である一方、気が弱い動物とも言われます。一人ぼっちになり、どう進んだら良いか分からない。次の瞬間、誤って崖から落ちるかもしれない。食べ物を見つけられなくて飢え死にするかもしれない。あるいは野の獣に襲われて命を落とすかもしれない。そんなところへ羊飼いて来てくれて、肩に担いで元の場所へ連れ帰ってくださる。ところがここで喜んでいっているのは誰でしょうか。何とそれは羊飼いです！こんな迷惑をかけたどうしようもない羊が取り戻されたことを羊飼い自身が喜んでいいます。これはまことの羊飼いである神あるいはイエス様のお心を描いたものです。

しかしこれは決して犠牲なしではないことも覚えたいと思います。実際の羊を目の前にすると分かりますように、大人の羊は一頭でかなりの重さになります。羊飼いは羊を探し回ってすでにかなり力を使い果たしています。ですから見つけた羊に、自分で歩かせてもおかしくないと思います。ところがこの羊飼いは羊を担ぎます。羊は一人さまよい歩いて傷つき、怪我をしていたかもしれません。そうでなくても、弱く力を失っている状態だったかもしれません。羊飼いはその羊のことを大切に思って担ぐのです。そうすることによって、この羊飼いは羊の重荷を自らの上に負っています。

これはイエス様が私たちの重荷をご自身の上に引き受けて下さる姿を象徴するものでもあるでしょう。それはやがて私たちの代わりに十字架にかかってく下さる姿を指し示すものでもあるでしょう。この羊飼いは無事家に戻ると友達や近所の人たちを呼び集め、「一緒に喜んでください」と言います。自分の喜びを他の人とも分かち合いたくてそうするのです。

2 つ目の「なくした銀貨のたとえ」も内容的には同じです。8 節にドラクマ銀貨を 10 枚持っている女の人が登場します。「ドラクマ」という部分には印がついていて、欄外の 8 を見ると「ギリシア銀貨の 1 ドラクマはローマ銀貨の 1 デナリに相当し、当時の一日分の労賃に相当」とあります。今日、一日分の労賃を計算しやすいように 1 万円とすると、この人は 10 万円を持っていることになります。この 10 万円について色々な見方がありますが、彼女にとってこれはもちろん貴重なものでした。もしかするとこれは彼女の手元にあり、彼女の生活を成り立たせているすべてのお金だったかもしれません。自分のいのちの保証となるものです。その内の一枚をなくしてしまいました。10 万円の内、1 万円ですから大変です。彼女は注意深く探します。当時の家は窓がないか、あっても暗い家が一般的でしたし、狭いスペースに色々置いてある家が多かったようですから探すのは大変でした。ランプをつけて隅々まで探します。ここでも「見つけるまで」捜すとあります。これを私たちに当てはめれば、私たち一人一人は神の前にこのように尊く見られているということです。一枚くらいなくてもいいか！ではなく、神にとって大切なものとして探し求められている。そうしてついに見つけた時にどうするでしょう。この女の人も友達や近所の女たちを呼び集めて「一緒に喜んでください。なくしたドラクマ銀貨を見つけましたから」と言います。それほど失われた自分のものを取り戻すことはこの女にとって、引いてはこの女が指し示す神にとって大きな喜びであるということです。

このたとえを通してクリスマスのこの日、3 つのことを心に留めたいと思います。まず一つ目は神が私たちを求め、私たちを探すために来て下さったということです。この二つのたとえにおいて失われたものは自分から元の状態に戻ることはできません。羊は自分から迷い出しましたが、もはや自分から飼い主のところに戻ることはできない状態になっていました。銀貨についてはなおさらそうです。羊飼いは女の人の方が動き、探し、見つけてくださることにすべてがかかっています。しかもあきらめずにそうしてくださることにすべてがかかっています。クリスマスとはまさにこ

のことを神がしてくださったという出来事ではないでしょうか。罪を犯して神から離れ、失われた存在など知らないと言って、神は私たちのことなど気にかけず、そのまま過ごされても良かった。しかし神は探してくださいました。イエス様を遣わし、イエス様が私たちのところまで来てくださいました。そのために多くの犠牲を払うことになっても、そうしてくださいました。このことを私たちはこの日に覚えて感謝したいと思います。

しかしこのことは私たちが何もしなくて良いということではありません。たとえの結論部分である7節と10節を見ますと、いずれも「一人の罪人が悔い改めるなら」と言われています。確かにたとえの中で羊が悔い改めたとは言われていませんし、ましてや銀貨は悔い改めることなどできません。これらのたとえは神が主導権を取って私たちを探し出してくださいることを強調しています。しかし7節と10節の結論部分は、そうして神のもとに立ち返ることにおいては、私たちの側での悔い改めが必要とされるということを述べています。これはここでイエス様の言葉を聞いていた人たちに良く当てはまることだったでしょう。取税人や罪人たちはまさに神の前から失われた羊や銀貨そのものでした。しかしイエス様が探して見出してくださいさって、今、イエス様のもとにいます。そしてその彼らは確かに今、悔い改めています。悔い改めとは人生の方向転換を意味する言葉です。彼らはこれまでの自分中心の生活から神とともに歩む生活へ方向転換しています。それは1節で彼らがイエス様の話を聞こうとして近くにやって来たことに現れています。今や神の教えに耳を傾け、神の教えを喜び、神を中心として歩もうとしています。それはイエス様が導いてくださった生活ですが、確かにそこに悔い改めという実が結ばれていたのです。

2つ目に今日の箇所から覚えたいことは、悔い改めて神のもとに戻って来た者を神は大いに喜ぶということです。7節：「一人の罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人のためよりも、大きな喜びが天にあるのです。」 10節：「それと同じように、一人の罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちの前には喜びがあるのです。」 実に驚くべきメッセージは、私たちが神のもとに取り戻されることを神ご自身が一番喜びとしてくださいるということです。私たちは自分を見て、神に喜ばれるとは到底思えないような自分だと思えます。ところが神はこんな私たちの救いを誰よりも喜びとするということです。その神の喜びは次の放蕩息子のたとえにもさらに劇的に表されます。財産を湯水のように使い果たして一文無しとなり、ボロボロにな

って帰って来た息子を父は駆け寄って迎え、胸に抱きます。そして、さあ祝宴を始めよう！と言います。息子はこんな自分が受け入れられたことに驚き、心から感激したでしょうが、そこで彼が見たのは自分の喜びよりも父の喜びです。良きものなど何もない私なのに、そんな私の立ち返りを神はこの上なく喜ばれることをこれらのたとえは示しています。

最後3つ目に覚えたいことは、神は「一緒に喜んでください」と周りの者たちを招いているということです。これはこのたとえが語られたパリサイ人や律法学者たちに対するダイレクトなメッセージだったでしょう。取税人や罪人たちが神の救いにあずかっているのを見てつぶやくのではなく、一緒に喜びましょう！とイエス様は言っているわけです。次の放蕩息子のたとえではよりはっきりとそのことが言われます。弟息子が帰って来て父に受け入れられているのを見て兄は怒ります。「あんな罪人を受け入れて食事まで一緒にする」と文句を言っていたパリサイ人たちと同じです。そのよう怒って家に入ろうとしない兄息子のために、父自らが外に出て来て色々なだめを見たこと記されます。しかし最後に最も大切なメッセージをこのようにはっきり言います。32節：「だが、おまえの弟は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのは当然ではないか。」 イエス様はたとえの兄に当たるパリサイ人たちを切り捨ててはいません。喜びの祝宴にあなたがたも一緒に来て、共に祝う者となりなさい！と招いているわけです。果たしてこの招きに兄はどう応答したのか。それは書いてありません。それはこのたとえを聞いたパリサイ人たち、そして私たちそれぞれが自分の応答をもって書き記すべきことだからです。その応答がどのようなものであれ、神ははっきりとここで、わたしはどんな罪人であっても、その者が悔い改めてわたしのところに戻って来ることを大いに喜ぶという御心をはっきり語っているわけです。ある意味でイエス様はこの神のお心をはっきり言い表し、そのように生きたため、これを面白くないと考えた人たちから拒絶され、殺されることになります。つまりイエス様はご自分の命をかけてこの真理を話されたのです。ヘブル人への手紙12章2節：「この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをもともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座された」というみことばが思い起こされます。イエス様は私たちが神のもとに取り戻されることを神と同じ心で何よりの喜びとされたので、たとえご自分のいのちをそのために捨て置くことが求められても、その道を喜んで進んでくださったのです。

今朝、私たちは主が私たち失われた羊、失われた銀貨を探すために来てくださったことを心から感謝したいと思います。そこにはやがての十字架へと至る大きな犠牲がセットになっていました。しかしイエス様は私たちが神のもとに取り戻されることを喜びとして、この世に人となって来てくださいました。このクリスマスの出来事、イエス様の誕生を私たちは心から感謝し、神を礼拝したいと思います。そして「大きな喜びが天に」とあると言われるほど、私たちの救いを喜びとしてくださる神を仰ぎ、その神の大きな愛の中に歩む者とされたいと思います。また今朝は一人の兄弟が新たに主に見出され、洗礼式にあずかろうとしています。この時、何よりも天の御使いたちの前に大きな喜びがあることを思います。その神の喜びを仰ぎつつ、一緒に喜んでくださいと言われる神に応答し、心から喜びをともにする者でありたいと思います。そしてこの神の喜びがさらに広がるために、この神の喜びを知って生きる幸せに一人でも多くの方々を招くために、仕え、用いられる私たちの歩みを祈り求めて行きたいと思います。